

特 集

「トラウマ」への学際的アプローチ

京都ノートルダム女子大学教授 室田 保夫
 関西学院大学名誉教授

今回の特集論文の課題は「トラウマ」「PTSD」というキーワードにして人間や社会、精神的な課題にアプローチしていくこととなった。トラウマは日常の危機、地震などの自然災害でのショック、戦争体験、虐待やDV、事件等々いろいろな場面、ケースが考えられる。その時、しばしば当事者への不安や健康を考えながらサポートがおこなわれている。それは日常生活ときわめて密接な関係をもっている。その症状も多様なケースがあり、したがってトラウマを理解し対象者に寄り添うためには、複眼的な視野が必要である。不安解消とともに積極的な日常回復、エンパワーメントへの志向など、この課題はソーシャルワークやマインドフルネス等への関心の深化とも関係をもっている。トラウマの課題は人間福祉学が対象としていかなければならない一つの領域でもあろう。そして学際的な学への対象として、今後、その存立基盤を問うていく必要があるのではないか。こうした関心から今回、トラウマ学の持っている本質への追究を幾つかの専門分野から論じていただくことにした。そして以下のような「趣意」を執筆者の皆さんにお送りした。

「トラウマ」は古くて新しい概念である。戦前に精神分析理論において萌芽したトラウマ概念は、1980年に米国で成立した精神疾患の診断基準「外傷後ストレス障害 (PTSD)」を通して語られるようになった。日本社会に

「トラウマ」が浸透するきっかけとなったのは、さらに時を経た1995年の阪神淡路大震災である。

あの震災から四半世紀、トラウマの概念的枠組み、あるいはその表象は、人々の苦悩をいかにとらえてきたのであろうか。トラウマは、苦悩の本質をとらえ、人間理解とウェルビーイングの醸成につながる道筋を照らす光源となり得るのであろうか。

東日本大震災の被災者、増加の一途をたどる虐待やDV被害者、さらにMeToo運動で顕在化した性暴力を受けた女性たち。さらに戦争という問題を考えてみても、その体験で生じた生きる苦悩やストレスは明確なPTSD、トラウマと理解される。さらに敷衍すれば平和と言った課題とも関係する。トラウマを単に「症状」に置き換えたり、かたちの見えない曖昧な俗語の範疇にとどめてしまえば、これら逆境的な体験をもつ人々の痛みを矮小化してしまうことになりかねない。

本特集では、医療にとどまらず、多彩な学問領域から「トラウマ」の「今」と「これから」を語っていただく。そして、「トラウマ」という概念をより多角的に、文化、生活、政治、社会へと視野を広げ重層的に理解することで、人間福祉の中核となっている「人間」と「福祉」、そして社会を根源的に追究し、

その可能性を含め、今後の研究と実践の礎となるのではないかと考え、かかる特集を組むことといたしました。

この春からのコロナ禍の日常生活や研究の困難な状況下で、これまでと違う研究生活を余儀なくされている大変な時、お送りした先生方から5篇の玉稿を戴くことが出来た。ここに心より御礼申し上げます。次第です。

この課題に際して、小生は専門ではないが、以前手にした中村江里氏の『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』（吉川弘文館、2018）という著書を偶然読んだことを思い出す。近現代の社会福祉の歴史を研究している小生にとって、戦争という課題は福祉と重要な関連をもっており、その関心があった。この著で『『戦場』という空間から離れ、『戦時』という時間が終わってもなお残る傷を生み出す——そして『戦後』もしくは『新たな戦前』になるかもしれない時代を生きる私たちもまた、その傷とともに生きている——ものとして戦争を捉え直すことが必要』（307頁）という氏の文言が印象深かった。もち

ろんこれは地震や津波といった自然災害や人災、火災、水害、そして犯罪、病気、差別といった様々な対象に共通する日々の生活に直結する重要なテーマである。したがって広く人間を追究する文学や宗教などの領域でもある。トラウマも他者からは不可視の領域で、目に見えないウイルスと共通しているように思えるが、如何に可視化していく作業でもある。

本特集は「人間と環境の交互作用」を通して生活や福祉問題を問うていく「人間福祉学」の研究に少なからずの貢献をしていくものと思っている。「コロナ禍」という現在と、ポストコロナの社会に向けて、日々の研究の大切さと新しい領域への冒険の必要性を感じている。人間と環境、この環境は自然環境を含め、文化、社会、政治的等の環境を改めて考えていく重要性を教えてくれている。

最後にこの特集を組むに際して、本学の池埜聡教授から多くの示唆とご協力を戴きました。感謝申し上げます。そして玉稿を戴いた先生方にあらためて深謝申しあげる次第です。